

令和元年度 第1回 新潟市男女共同参画推進センター運営委員会 議事概要

日時： 令和元年6月12日（水） 午前10時～正午
場所： 新潟市男女共同参画推進センター「アルザにいがた」 307・308研修室
出席者： 新潟市男女共同参画推進センター運営委員
齋木委員、西條委員、齋藤委員、指田委員、福田委員
事務局（男女共同参画課）
稲垣課長、長谷川課長補佐、新井課長補佐、小林主査
団体（敬称略）
「特定非営利活動法人 女のスペース・にいがた」高山
「劇団 blue ジーンズ」廣川
「特定非営利活動法人 新潟フェミニストカウンセリングセンターまど」寺崎
「新潟ワーク・ライフ・バランス研究会」高橋
「わいわい夢工房 “防災カフェ” プロジェクト」大橋

1 開会

2 男女共同参画課長あいさつ

3 運営委員・男女共同参画課職員紹介

4 男女共同参画市民団体協働事業審査

(1) 「児童虐待とDVを考える講演会及びワークショップ」（女のスペース・にいがた）の審査

（団体） 事業概要説明

（西條委員） 事業計画書の中で、「さらに有効な連携」という言葉が2回出てくるが、「さらに」という言葉は、現在何らかの連携があるから使うと思うので、それについて説明してほしい。

（団体） こちらの相談ケースについて、通報的なことはしているが、児童相談所は、私たち民間団体にとってある意味遠い存在になっている。もう少しきちんと顔の見える関係性があれば、もっと子どもや母親に対して連携して同じ相談事例を深めていけるのではないかということである。

（指田委員） この講座を行うにあたって、例えば虐待のまさに当事者である若いママなどには、幼稚園や保育園を通してチラシを配布するなど、何かそういったことを考えているか。

（団体） 非常に難しい。若い女性に届けたいとは思っているが、幼稚園や保育園などにチラシを持って行っても、それを受け取ってくださるかというのものもある。本当はそこに一番届けたいと思っているので考えたい。

（指田委員） 採用されれば市の事業として認められるので、置くことは可能ではないか。ただ、タイトルは虐待と書いてあるとどうしても手に取った方が虐待していると思われてしまうので、若いママ・パパ向けであれば文言を変えたり、「気分が上がる保育術」のようなタイトルで、虐待とDVは小さくしたりするとより集客が上がるのではないか。この企画書を読んでいると、若い当事者であるマ

わたちが一番の届けるべき相手であると思うので、そこをしっかりとさらにいいと思った。

(団 体) 採用されたら、いわゆる支援者向けチラシと、一般のパパ・ママ向けのチラシを2枚作ればいいかなと考えている。

(齋木委員) 2年前に企画した女性の生き方講座で、アルザの相談室では離婚の相談が多いと聞き、離婚について講座をやった。岡野あつこさんをお呼びして、「未婚・結婚・離婚・再婚」と離婚だけでなくオブラートに包んだタイトルにしたが、思った以上に人が集まらなかった。本当の当事者は、新潟の県民性で来られないのかもしれないので、ダイレクトに言わないほうがいいと思った。

(団 体) 本当に一番来てほしいのは、当事者の若いパパ、ママで、そこで児童相談所とつながれば相談しやすい環境がつかれるかなと思っている。それだけでなく、児童虐待は通報義務もあるので、ご近所の方々も意識することができれば、もっと虐待死事件などが防げるのではないかと。連日こういうことが報道されて、なんとかならないのかという思いが非常に強い。がんばってみたいと思う。

(福田委員) 加害している夫や恋人は自覚がない場合が多いので、それに気付かせるような話、ケースの具体的な話を所長ができるのか。

(団 体) 恐らくレアケースは無理だと思う。一般的なケースであれば話してくれるのではないかと。一般的なケースで手続き的なことも含めてお話していただければ、相談した時、児童相談所がどう動くかがわかり、もっと相談しやすかったり通報しやすかったりするかなと思っている。

(2) 「演劇 となりの女 増進、変身、ああザンシン (仮称)」 (劇団 blue ジーンズ) の審査

(団 体) 事業概要説明

(西條委員) 市民の方に表現力をつけてもらうためのワークショップはとてもいいと思うが、ワークショップは具体的に何時間でどんな内容か。

(団 体) 内容は、今わかっている範囲では、外部の劇団を経験した方の指導を受け、それによって、より深い交流を持つ。ただ演劇を見るだけではなく、演技を作り上げていく中で、気付かなかった感情の発見と、それを演技に反映させるためにより豊かな表現を求めることを目的にワークショップを1回やってみようということになった。時間はまだ決まっていない。

(齋藤委員) 市民をどんなふうに通劇に参加させるのか。

(団 体) いろいろな形で芝居にでることは可能。通行人役であっても芝居の世界には必要なもので、役の大きさにかわらず、芝居の世界をつくるということに参加してもらう。

(齋木委員) すばらしい企画で、家に閉じこもっている人や、就労しようという人に、社会とかかわって何かをつくりましょうという、楽しくておもしろい提案だと思う。今後いろいろなところでやるような大きなビジョンなどはあるのか。

(団 体) 万代市民会館まで足を運べない方に、その地域に入ってワークショップなり公演を見ってもらうことで、私たち劇団を知ってもらったり、参加してもらったりして、自分を解放して、エネルギーを充電してほしい。各地でやれたらいいと思っている。

(3) 「自分を大切にするためのヨガ講座」(新潟フェミニストカウンセリングセンターまど)の審査

(団体) 事業概要説明

(指田委員) ヨガをしながら講師が話をするのか。

(団体) ヨガは呼吸を整えながら自分と向き合う時間なので説明はしない。今、「私を大切にするためのカウンセリング講座」をアルザで開催していて、後期も開催するが、その参加者や相談室の利用者にも声をかけて、講座とヨガを連動させたい。

(指田委員) この試みは新しくいいと思う。時流的にヨガやピラティスなど何か運動にプラスして講座をすると、ものすごく集客が上がり、2倍、3倍の効果が出る。30代、40代、50代でもいいが、虐待や不定愁訴を訴えているような、何らかの形でジェンダーの被害にあうような方たちをターゲットにしたほうが人は来ると思う。

(団体) 「私を大切にするためのカウンセリング講座」に参加する方たちは、何らかの生きづらさを抱えてアルザに来ている。その方たちと相談室の利用者に声をかけるとなれば、30代、40代の方をターゲットにしているつもりだ。ただ、市の講座なので間口は広くしておく。

(指田委員) そうすると、募集人数15名のほとんどが声をかけた方であれば、講座が終わった後に自主講座として皆でお金を出し合って、講師の方に来てもらってもいいのではないか。

(団体) 場所の広さの関係で15名だが、声がけだけではなく広報もする。

(福田委員) 心と体がつながっていることに自覚がなく、苦しくてもがんばってしまう方が多いというお話だったが、言葉で指導をしないと、この講座に参加されても、気持ちがいいだけで終わってしまうのではないか。

(団体) アルザにいがたの相談室の案内など情報提供はしっかりしたい。

(福田委員) 1回では気付かないこともある。ヨガをやったままで終わってしまうのはもったいない。

(団体) 呼吸法を知るといのは、もし何かあった時に、自分で自分の気持ちを落ち着かせるやり方を手に入れるということ。それをずっとやるかは本人次第だが、ずっとプロに教えてもらわなくても呼吸法を身に着けることはいいことである。

(4) 「講演会「一人ひとりの働き方改革」～生活時間アプローチでとらえよう!～」(新潟ワーク・ライフ・バランス研究会)の審査

(団体) 事業概要説明

(西條委員) とてもいいと思った。ただ、家庭の中での時間と言ったとき、女性だけが参加してもあまりうまくいかず、できればパートナーと一緒に参加するとなおさら有効な内容ではないか。集客の方法も、女性だけ、男性だけではなく、できればパートナーと一緒に感じたが、どのようにPRすれば一番効果を上げられると考えるか。

(団体) パートナーと参加してもらえれば理想的だと思うが、今までの開催のように経済同友会、企業で働く管理職の方にも聴いてもらいたい。市民向けに「パートナーと参加してください」とチラシに書き加えることもいいと思う。特にパートナーと一緒になければだめとはしないで、企業人も含めて、一般市民が対

象になると思う。

(齋木委員) 新潟ワーク・ライフ・バランス研究会は、どんな方が集まり、何を目的にした団体なのか。

(団体) この会は、株式会社ワーク・ライフバランスの研修を受け、コンサルタントの認定を受けた新潟県内の人たちが集まり、学習したものを県内に広げて推進していきたいというのが発端だった。そこに興味を持っている方たちが加わって、今では研究者や一般市民の方も多く参加している。

(齋木委員) 今回は、このことについて勉強したい方が集まる会なのか。一般的な家庭人は集まりにくい題名や内容なのではないか。

(団体) 「一人ひとりの働き方改革」というタイトルで提出していたが、もう少し考えてみたらというアドバイスをもらい、「私が決める。生活時間と労働時間」に「働き方改革の今をとらえて」という副題をつけようと思っている。内容は、ドイツで行われている生涯時間講座の紹介もあると思う。今学会で議論されている非常に新しい考え方で、10年前からドイツで実践され、ヨーロッパでは知られていることだが、日本では新しい。ものごとが始まり一般化するには、今の働き方改革もそうだがこういった道のりは必要なもので、アカデミックな話も半分くらいはあると思う。働き方改革そのものは生活の中に入り込んでいるので、ぜひ新しい感覚を取り入れながら生活にいかしてもらいたいと思っている。

(5) 「防災カフェ in にいがた」(わいわい夢工房「防災カフェ」プロジェクト)の審査

(団体) 事業概要説明

(西條委員) もし仮に審査に通らなかったらどうするか。

(団体) もともと自分の家で、ちょっと遊びに来ない、ついでにご飯も食べていかないということで2人、3人とやっていたものを形にして、もっといろんな方に知ってもらおうと始めた。お母さんたちだけでなく、お年寄りや障がい者、介護されている方、いろんな方がいらっしゃるので、普段の生活の中でできることをやっている。初めからないもの、審査に通ったらもうけものと思っており、徐々に面白そう、やってみようと思ってきた。覚悟を決めて立ち上げた。

(指田委員) 内容も充実しているし、企画の段階から内容も固まっていると思うが、そろそろ3年目で、ひとり立ちしたいとか、自分たちで参加者から寄付や参加費という形でお金をいただくということは考えていないのか。

(団体) 調理など材料費が必要なものは必ず参加費をとっているし、市の事業でなければ、会場費や資料代、チラシの費用などは、皆で出し合ったり、参加者に出してもらったりということもやっている。これをあてにしているということではない。会員制にする、グループになる、規約にすることなどは、特に今の若い女性はとて嫌がって、それだったらできないという方のほうが多い。そこを巻き込んで、自分のこととして考えてもらいたい、こういう会です、こういうことだから一緒にやりましょうと言っても、それならいいと言われるがちなので、敷居を低くして、こういうことが不安だわ、知りたいわということを書いて、次のプログラムを考えている。今回も、もっと時間をとってやりたいとか、これに参加できなかったけど、来年もやってほしいという去年の声に答えているので、全く同じことをやっているわけではない。気持ちを汲ん

で次にいかそうと、そういう人たちをスタッフに巻き込んでやっている。

(齋木委員) 最初の小さな思いからきちんと形にされて素晴らしいと思った。イベントを行って、つながったり、グループができたりしているが、事業の目的にリーダー育成とあり、新潟もいつ災害が起こるかわからないので、実際に災害が起きたときに横のつながりや、こんなときはこうしようということはあるのか。

(団体) 実際は、この3年間だけでなくその前からやっているのだから、避難者の方は帰られたりして、新潟にいる方は少なくなった。新潟に転勤で来た若い母親からは、こういうことならできる、地震のとき知っている人が新潟にいないので怖かったなどの声をいただく。今回、スタッフになると言ってくれた2人が県外に転出し、幼稚園はこういうことをやっている、学校はこういう準備をしていると、それぞれ行ったところの情報を入れてくれる。それを聞くと新潟は全然やっていないと思い、市に新潟はどうなっているのか問い合わせたりしている。それぞれの職場や家庭、地域での防災、減災についての情報を取り入れて、障がい者の視点が足りないなど気付かされているので、組織にはなっていないが、個人的にはつながりが広がっている。

(審議非公開)

5 その他

(事務局) 次回の運営委員会は10月頃の開催を予定しているが、あらためて各委員の日程を調整のうえ案内する。

(参考)

決定団体名・事業名

団体名	事業名
特定非営利活動法人 女のスペース・にいがた	児童虐待とDVを考える講演会及びワークショップ
劇団 blue ジーンズ	演劇 となりの女 増進、変身、ああザンシン (仮称)
特定非営利活動法人 新潟フェミニストカウンセリング センターまど	自分を大切にするためのヨーガ講座
新潟ワーク・ライフ・バランス研 究会	講演会「一人ひとりの働き方改革」～生活時間ア プローチでとらえよう!～
わいわい夢工房 “防災カフェ” プロジェクト	防災カフェ in にいがた

※委託料希望額の合計が予算を上回ったため、一部減額で決定した団体あり